

薄幸の小姓（その3）

トリストラン・レルミット
野池恵子訳

22. 薄幸の小姓はロンドンに到着し、商人の家で非運に遭遇する。

私があゝの哲学者から厄介になるよう言われていた商人の家に着いたところ、家の主は持って行った手紙を読むや、すぐさま私に何度も愛撫を繰り返しておこなって、一家の子供と同じ扱いをするよう命じました。この商人はかなりの金満家で、遠国との商取り引きを数多く手がけてい、少なくとも装備の行きとどいた船を二、三隻は所有していました。ここで私の困ったことといえば、私の言葉のわかる人間が商人ひとりしかいず、何かの所用でこの人が外出してしまうと必要なものをどうやって頼んだらよいかわからなくなってしまうことでした。その不便に不満をこぼすため、私は旅中に好遇を得た司厨長の投宿する料亭にでかけて行きました。するとそこにいあわせたある礼儀正しい男が、私の苦勞しているのに同情してロンドンで印刷された小冊子を一冊くれ、それで必要と思われることすべてについてどう言うかがわかったのです。私はたちまちのうちに本一冊を暗唱してしまい、また家の召使いたちが喜んで私の学習を手助けしようとしてくれたおかげもあって、なまりなく発音することまでできるようになりました。ところが、新しい知識は私に便利な思いをさせてくれるはずでしたが、現実にはひどく不便な目にあわされることとなってしまいました。商人の家には仲買の役を勤める近親の者が一人い、この男の夫人がかなりの美人だったのです。少なくとも、色白で血色がよく、健康で、せいぜい二十二、三歳ぐらいにしかありませんでした。夫がまったく風采のあがらなかったこの婦人から、私は始終流し目を使われ、愛の営みへ乗りだすよう誘いかけられたのです。私は気がついていました、彼女が目を大きく見開いて私をみつめ、こっそりと秋波を送っていたことに。また、この国の言葉を私が覚え使うのを彼女が大きな喜びを感じながら聞いていたということにも。ある晩、家人が余りいず、また、いる者も地下室の一隅に何トンもある商品をおろすので忙しかった折、彼女は私の私室にやってき、まるで私が理解しているかのように振る舞って、感動をこめてある話をしはじめ、数分ものあいだそれについて話し続けるのでした。私は話に対してはなにも答えられませんでした。しかし、彼女は私が無視したのだと信じる風をし、先の話をもっと激しい口調で話しなおすのです。ようやくこちらの辛抱に彼女が嫌気を催してきたので、今度は私がこちらの話身を振り使って伝えようとしたところ、突然、彼女はさよならの一言しか言い残さずに立ち去ってしまいました。そののちも、何度か部屋に通ってきて、私には理解不能の自分勝手な話を私に引き続き聞かせました。そういう時は、話の先が見えなくなるのではないかと恐れたのでしょうか、中断するのを嫌がるのです。私は言われているこ

とがさっぱりわからず、この艶めかしいおつきあいにはさんざん悩まされましたが、ある事件がきっかけとなって、茶番劇も幕を閉じることとなりました。ある晩、この婦人の夫が街で大盤ぶるまいをしたすえ自分もひどく飲みすぎ、別にそれだからと言ってとがめだてされることもなく、この界限に戻ってきた時のことです。バックス神の仕業としかいえないほどの正体不明の体で、わずかに話す努力だけが見てとれるといった有り様でしたが、その言葉もはっきり発音されていたわけではありません。たえずしゃっくりがでて、何を言っているのかわけがわからないのです。おまけに頭がひどく重いので、足もとが定まらず体の重みですぐによろけてしまいます。度を過ぎて酒を飲む者は、きりなく飲もうとするものですが、この男も家に入るやいなやぶどう酒を運ばせ、夕食の相伴をさせるため家人を呼び寄せるのです。私もそこに行き、それで不快な場面に居合わせることとなりました。悪徳に対し嫌悪の情をつちかうには、悪徳そのもののイメージを描いて見せるほどよいことはなく、子供たちの前で奴隷を酔わせ彼らに節酒を教えたギリシア人たちには、まさに良識が備わっていたのだということを私はこの場で学びました。この仲買人は食卓で何度となくみだらな行為におよび、その言葉およびその振る舞いから、もはや男には人間が他の動物に対し持っている優位性というものが残されていないと判断されました。ところが、夫人のほうはただ微笑んでいるばかりで、夫の例をみて分別を正すということもなく、同じようにして同じ地点に達しようとするのです。金めっきのほどこされた銀製の船型をしたカップを何度も飲み干すので、そんなことでは理性までも難破してしまうのではないかと、私には疑われました。ついに、夫のほうテーブルからころげ落ちたため、夫人と召使い二人と私とがようやくのことで、彼を寝床まで連れて行きました。仲買人の世話をしたのち私は私室に戻りましたが、そこに夫人が姿を現し、私の腕を掴んで胴衣を着る暇も私に与えずに、燭台を持って彼女の寝台のある閨房に私を連れて行くのです。力づくで私は従わされて、彼女が私に対し何を望んでいるかわからないまましていると、彼女は寝台の縁に腰をかけてぶどう酒のたっぷり入った大きな瓶を下から取り上げ、足下の床にあった船型のカップをそれで満たすように促します。私は飲みたくないという合図を何度も彼女に送りましたが、彼女の方はそれで満足などせず、カップに酒をついで私の健康を祝して飲むといい、一滴も残さずに飲み干しました。ついで彼女は同じ船に装備を施し、私に同じ風に操縦するよう言います。カップをさしだす手があまりにも震えたため、私に飲ませようとした酒が少しこぼれましたが、私はその液体を全く好まず、カップの中身を飲み干す決意をすることができませんでした。しかし、苦痛を覚えながらも不承不承、カップを口もとまで運んで薬湯を飲もうとした時に、それから逃れるための素晴らしい機会にめぐりあったことに気がつきました。ちょうどその時イギリス女性が、夫が深く寝入っているかどうか確かめようとして、顔を夫の方に向けたのです。私はこの時を巧妙に利用してゆっくりとぶどう酒を肩に流し、胃を傷めるよりはシャツを汚すほうが良いとしたのでした。このバックスの乱酔した巫女は私の策略には気付かず、何だかわけのわからない激昂にかられて両手を私の髪の毛にのりつけ、頭を彼女の顔面近くに持って行き、鼻先でしゃっくりをします、心地の良いくないことといったらありません。彼女を振り払おうとはしても、しっかり抑えられているので

思うようにならず、しまいには彼女が嘔吐を催し、私の頭は汚されてしまいました。突然飲んだぶどう酒が口からみな吐きだされたのです。この洪水から我が顔を救うためにできたことと言ったら、額を少し下に向けること位のことでした。雷雨で髪はびしょ濡れとなり、おぞましがわきあがって来て、私は、その無分別な女の手から逃れようとあらゆる努力を払ったため、彼女も手を放さずにはいられなくなりました。翌日は、この醜悪な行為を思い返して私は警戒し、あの鉄面皮な美女と二人だけになる機会を回避しました。しかし、彼女のほうはもっと思慮深く、酔いがさめるとまもなく私にこの家から出ていくよう忠告してきました。

23. 薄幸の小姓はいかにして商人の家を出て、どのようにして司厨長の力添えで彼の友人たちの世話になったのか。

二、三度、私はあのイギリス女の目の前を通りすぎましたが、彼女には一瞥だにしませんでした。そこまで彼女の醜悪さに恥ずかしい思いをし、また、彼女が姿をあらわしそうなところには一時でも足を止めまいと、心に決めていたのです。それなのに私がフランス人の教区長に会いに行こうとした時、彼女は私の後をつける機会を見つけ、外套を引っ張って私をノルマンディーの人がやっている一軒の本屋に無理矢理に連れ込んだのです。そこのおかみさんは彼女の友人で英語をひどく流暢に話していました。この彼女の打ち明け話しの相手が私たちに通訳の役をしてくれ、私のことで彼女と夫の間に大混乱が生じたこと、その野蛮な夫が夫人の寝台の閨房の灯が明るくていったん目をさまし、朝になってから彼が酔っぱらっている間私たちが二人一緒にいたのをはっきりと思い出したこと、夫人はこの思い過ぎを取り除くため、また、二人がともにいたというのは夢を見ただけのことだと信じこませるために出来る限りの努力をしたものの、夫からその疑いをとり去ることができなかったこと、その上、男の嫉妬心が余りにも強く小刀のひとつつきで私を殺そう考えるまでに到っていることなどを、私に伝えます。ノルマンディー人の本屋のおかみさんは、さらに自分の意見だとして、気をつける必要があると言い、その男のような身分のイギリス人はひどくひねくれていて復讐心が強いから、最良の方策はもう家には足を踏みいれないことだ、と助言してくれました。この知らせは全くのところ気分の良いものではなく、皆が私に与えた忠告は受け入れるにはあまりにも腹立たしいものでした。あれほどまでに甘美な希望で私の心を満たしてくれた哲学者と別れてから二週間とたっていないのに、もし私たちの落ち合う場所から私が僅かでも離れば、哲学者が約束通り私を迎えにきても、私の近況が伝わらなくなってしまう、と私には理解されたのでした。一方、仲買人の愚かしい嫉妬心がもとで何か醜聞でもおこったら、哲学者は私を連れていくのが嫌になってしまうのではないかと危惧されました。これらのことすべてを考えいろいろ迷った末、私は一番確かな方法をとることとし、一家の主である商人のもとに人を遣わせて私からの挨拶を伝え、町に友人の何人かがやってきて三、四日つきあってくれるよう頼まれたと言ってもらいました。そして、その間、例の男が訪ねてきたらフランス人の教区長のところに、その旨伝えたいとお願いしました。この方策は首尾上々のようにみえました。商人はきちんと伝言しよう

と約束してくれ、また、遣いの者にはあの大混乱を知っているようなふうは見せなかったということです。それを聞いてある程度までは気持ちが和らぎ、私はもう地理学書や様々な旅行の本の読書のことしか考えなくなりました。あの博学の道案内が誓い通りに私を迎えにきた時、一緒に訪問しようとするつもりでいた土地の、気温や人々の人間性、慣習についての考察を繰り返すばかりでした。時折、私は読書に飽きると、あの高潔な司厨長と市外まで散歩にでかけて行きましたが、ほんの僅かな私の親切に対し深い感謝の念を示してくれたこの司厨長は、日毎に私への愛情がつのって行く様を私に示して見せてくれます。あそこの美しい芝生に座って話をしに行ける日は必ず心安らかな一日が過ごせたもので、芝は犁刃で返されたことはかつて一度もなく、人口が多いこの都の住人の憩いのために、遠い昔から大切にされていました。よく私は本で読んだ話をいくつか、気晴らしになるような物語を何編か、聞かせていました。それをしごく喜んでくれた、寛大で情け深いこの友は、私に好意を示し、この国の貴族に有利な奉公口を探してあげようと密かに私に申しでくれました。ある日、私が読書に夢中になっているところに彼が喜びいさんで姿を現し、しっかりと私を抱き締め、支度をしてついて来るように言います。私が少じでも幸せになればと思える地位を私にみつけた、と言うのです。私は大変感謝し、またその知らせを深く喜んで聞いているように取りつくろいました。しかし、哲学者と旅をし、彼から素晴らしい秘密を学ぼうという希望を抱いていた私には、ほかの喜びはどれも色あせて見えました。それでも、この友が私の気持ちを知らずに紹介してくれた貴族たちに会いにでかけるため、英国で仕立てた服を着て身を整えることにしました。

24. どのようにして薄幸の小姓は、一人の貴婦人と知り合いになったか。

その高潔な司厨長はある大貴族の家に私を連れて行きましたが、ここでは見るもの全てが豪華なものばかりで、召使いは誰もがビロードを着てい、また、従僕は金めっきをした銀板に各々の数字が打たれたものを胸につけていました。そのどれもが血色のよい顔をしていました。私はこの素晴らしい壮麗さを心の中では意にもかきせず、どんな裕福な英国貴族よりも立場は自分の方が上だという気持ちでいました。私の先導者は英国の習慣を身につけた友人とともに居て、私に一人の婦人に挨拶をさせました。そして、私のことを大変褒めそやすので、私は顔が真っ赤になってしまいました。私の精神の高貴さを非常に高く買って、また、私が忠実であることを請け合って、私の保証人となってくれます。私はうわべはうまく取りつくろっていましたが、そんな言葉はどれも気にいらず、哲学者が私に与えた約束を反故にする日がこない限り、雇ってもらう意図は決して持てませんでした。ところが、この家で私がなすことになる仕事をめぐって、皆が質問を始めたところ、それが私には大変名誉なもので、全く難しいことではないとわかりました。先程私が挨拶をした女性の娘さんである、若い御婦人の教育に仕えるというのがその仕事で、私の国の言葉を話し、聞き取ることができるようにしてさしあげるというものでした。それでも、この立派な仕事をお引き受けするのを、私の能力のいたらなさを理由に何とか丁重に辞退しようとした矢先、私の生徒⁽¹⁾とされ

る人がこちらに来るのに気付きました。それは十三、四歳ほどの娘さんで、年の割には背の高い方でした。栗毛色の髪をし、デリケートな美しい肌の持ち主で、切れながの目は輝めていました。特に口が美しく、唇は珊瑚よりももっと綺麗な赤い色をしていたと言っても過言ではありません。彼女がやって来たことで私はおおいに心が惑い、もし、この時私の胸に手でも置かれたら、心臓が高鳴っているのに気付かれてしまったことでしょう。それほど私は動揺していたのです。私は妙に取り乱したまま、彼女の衣装に接吻をしに進みでました。彼女が、私のような有能の家庭教師を持つことができ大変気を良くしていると、また、二日前から私に会いたくてしかたなかった、と言いつけてくれた時には、私もまったく茫然としてしまいました。私の魂は魅力に溢れる人の姿を、目や耳から受け入れるのに精一杯で、言葉への配慮まではとても行き届きませんでした。ただ、どもり、恥ずかしくなるくらい臆病な言い方で返事をしていたようです。このようにして近付きになった後すぐに、私の美しい生徒は、私たちのやりとりを見つめていた母親の方を振り返り、私をここでどのように取り扱ったらよいかと思われるかについて一言、二言述べました。その後、部屋にひきとるために母親に挨拶をし、私に後についてくるよう命じました。彼女と二人の侍女とともに私は彼女の贅沢な私室に入りました。上塗りの壁は見事な技術で仕上げられ、金と紺青で光り輝き、所々に、立派に描き上げられた目に心地よい絵画の小品がかけられていました。この部屋の四方をぐるりと巡る石の縁飾りのようなものの上には、海の中から引き上げられた、世にもまれで貴重な逸品が認められました。一方の側には真珠の光沢のある帆立貝が並べられていました。また、反対側には、見事な出来の印章模様のある陶器の花瓶が、黒檀材の台座つきの、金か金めっきの銀の小模様がほどこされた透明な磁器とともに飾られていて、そのどれもが、どこかの著名な彫刻家の傑作に数えられるものばかりでした。また、この美しい小部屋には大鏡が二枚取り付けられていて、全身が前から後ろからも見られます。またあの美女が、四角いビロードのクッションを何枚も積み重ねあげて座っていた場所のそばには、銀と絹で縁を飾られた銀製の細長い柵板があり、立派な書物が沢山置かれていました。

この新しい女主人はくつろぎ、うちとけてくると、私に私の生まれ、地位の昇進、境遇などについて質問をし始めました。それらに対しては、当初からうまく隠そうと考えていたので、計画通りの答え方をしました。私の名はアリストンと言い、かなりの信用を得ていた商人の息子であるが、しばらく前にこの父を無くして母だけになったところ、商売に私が首をつっこむのを母がもはや望まなくなった、そこで、私は母にとっては役立たずの人間なので、世間を見に旅にでかけるのを許してくれるように母に頼んだ、こう私は彼女に言ったのです。そして、予定ではフランドルやオランダを訪ねるはずだったが、知り合いに出会ったところイギリスに立ち寄るといので、計画を変更してその人について来た、そして、ついに彼女のような立派な主人にめぐりあう幸運を得て、世界をさまよいたいという気持ちが突然失せてしまい、かくも名誉ある御奉仕に私の野望を絞ったのだ、と答えました。英国のこの美女は私の話のすべてに満足を感じたと言いつ、お側の女性たちにも意見を求めましたが、その尋ねかたが余りにも私をひいきにしたものだったので、彼女たちは、私への

讃辞以外のことは何も申しのべることができませんでした。そうしている間に、小姓が一人扉を少し開けたので、中の者が英語でどうしたのかと尋ねると、小姓もそれに答え、今度は私の美しい生徒さんが手で私の腕に触れながら、『さあ、どなたかがあなたに御用ですよ』と、私に言いました。

25. 薄幸の小姓はどのようにして司厨長と別れたか。

小姓とともに階段の下まで降りていくと、私を呼んだのが親切な司厨長であったとわかりました。私は大変な恩義を彼に負っていましたが、この時あの方は、私が置かれることとなった立派な身分の者がとるべき振る舞いについて、二言、三言助言を与えた後、別れの挨拶をしようと思っていたのです。彼は、二日前に仕事が完了したが、私がこの家にすっかり落ち着くの見届けるまではなかなか旅立つ決意ができていないでいた、と私に告げました。我々は司厨長の家に行って一杯飲み、六本の櫂で走る小船の発着場まで彼を見送りました。そこからグレーヴゼンド⁽²⁾まではすぐだったのです。司厨長は、必要な時は何時でも役に立ちたいと道々語った誓いの言葉を船に乗る前にさらに繰り返し述べ、指にはめていたいくつものダイヤで小さな岩状に仕上げた指輪を、彼の思い出として取っておくように強めます。そしてそのかわりに、私の指にあった金のリングを持って行きましたが、彼はこの交換を大喜びし、私のリングの価値を大変高いものにつりあげて考えます。涙を流さずに彼と別れることはできず、彼の姿が見えなくなるまでテムズ川の土手から立ち去ることができませんでした。卑しい身分の私にあれほど率直で高貴な心を見せてくれた、この新しい友の寛大さを褒め讃えながら、悲しい気持ちで私はそこから美しい生徒さんのいる館に帰ってきたのです。

26. 薄幸の小姓の初恋

新しいことはどのようなことでも、直ちに人から喜ばれるもので、あの日一日私は、自分の身の上におこった事件について考えてみる暇がまったく持てませんでした。娘さんから、その母親から、そして家の侍女たちから休みなく発せられる質問に、何時でも答える用意ができていなくてはならなかったからです。しかし、それだからと言って、待ち焦がれていたあの男のことを、その秘密の力で私を大変神聖に、大変裕福に、大変満たされた気持ちにしてくれるはずになっていたあの男のことを忘れてしまったわけではありませんでした。夜があけて家の門が開くやいなや、フランス人の教区長のところにあやまたずに出向き、着いたばかりの時に泊めてもらった商人が、私を迎えにくることになっていたあの非凡なる男に関して何か知らせてきたかどうか、確かめたのでした。しかし、何も知ることはできず、ただ、そこの使用人の聡明でそつのない少年にお金をやって、そのうち私が待っているような外国人が商人の家に来たかどうか調べに行ってもらうこと位しか、できませんでした。一方、与えられた仕事をやり始めて三、四日もたないうちに、美しい私の生徒さんは私の教え方に何か快いものを感じるようになりました。最初のうちは、言葉におかしな発音が出た時にそれを知らせるか、難しいと彼女の言う文章を説明するぐらいしかしませんでした。しかし、

私の顔に少し慣れ、私の話しを聞くのが楽しいと彼女が言うようになったので、私はちょっとした言い抜けをし彼女の関心を買って、短かいお話をしてさしあげ、また、小説に描かれた冒険譚を暗唱しました。こうした試みはみな、彼女の気に入って貰おうとする私の目論見に有利に働きました。彼女は同じ島国に住む恋人たちの身の上に起きた個人的な事件をいくつか知って、それらは私にとっては、まったく目新しい話でありました。しかし、彼女は神話についてはほとんど知らず、また、評価の高い英雄伝に関してはまったくと言ってよいほど知識がありませんでした。司教冠の金と真珠に比肩する巧みなできの作品⁽³⁾について考察をしたことはなく、優れたアリオストがその名の衰えるのをこれによって止めたあの精巧な物語⁽⁴⁾についても何も学んだことはありませんでした。さらに、タツの崇高なる筆が、聖地に偉大なるゴッドフロウ⁽⁵⁾を導くことでその名声を不滅のものにしたあの栄光にあふれる仕事⁽⁶⁾についても何も知りません。私がそれらの楽しい分野のことについても少しは彼女に教えることができる、と申しでると、彼女は私の中になにか非常に貴重な鉱脈を発見したような気分になりました。間もなく物知りになることができるのだと得意に思ったのですが、知識の獲得にあたっては、私が読んでさしあげるものに注意を払うというやり方しかとれなかったため、かなりの努力が必要になりました。そのため、可能であればどんな時でも逃さずに読んでもらいたい、と彼女は私に申しでました。母親と私の間にいて仲介の労を数多くとってくれたこの抜け目のない娘は、母親が年を重ねた真面目な性格の人だったにもかかわらず、彼女に私から聞き知った軽い物語をいくつも話し聞かせていました。また、青金石や金メッキの銀で縁飾りのつけられた、大理石の絵などの小さな贈り物を私にたくさんしてくれたほか、勉強用の燭台や寝台の閨房にかける小さな銀板などの銀製品も贈ってくれました。

ある時などは私がダイヤをしているのに気づき、侍女たちに、私の指輪を見せてもらい指の太さを調べてくるようにこっそり命じて、それよりもっと高価なものを贈ろうとまでします。この贈り物を渡す時の彼女の巧妙さ、意図した恩恵を偶然のせいにするために彼女が見出した方法などには、まったく驚かされました。この美女は、そばに私しかない時を見はからって手袋を片手からはずしながら、指輪を床に落としたのです。私がそれを拾いあげ、彼女に渡そうと思った時、彼女はその指輪が一番ふさわしい人の手にはない、彼女のためにそれを受け取っておいて欲しい、こう言うのです。絶世の美女から受けたこれらの寵愛のそれぞれは、私の魂に恋の炎を燃えあがらせる火つけ役になってしまいました。すでに私はこの気持ちのよい生徒に多くの魅力を感じてい、その時だったなら、あれほど素敵なることを私に約束してくれた哲学者がここに来るのをみても、彼女のもとを去る決意をするのはたやすくなかったことと思われまふ。繰り返してこの美しい娘について考えていたために、脳裏には彼女の姿が焼きつき、うるわしい彼女の姿が、絶え間なく私の頭を過るのです。昼間彼女をみかけない時間にも、彼女が寝床にいる間じゅうもいつでも、その姿は私の目には見えていました。無邪気にも目から仰いでしまったこの毒は、間もなく私の心にその悪意のほどをみせつけたのです。知らず識らずのうちにこの病が私の理性を侵し、心の平安には必要ではないようなやり方で一層やさしくこの人を愛するようになっていのに、私は気がつきました。彼女

は私の目の覚めている時に姿をあらわすばかりではなく、夢のなかにまで出現したため、私は不安な気持ちなしに一時も過ごせないようになってしまいました。

27. 薄幸の小姓が女主人から受け取った初めての愛の証拠は何だったか。

私の麗しの生徒は、私が彼女を大切に敬っていることに気がつき、私の熱情を見ても怒りませんでした。彼女は、自分が私にとって役立つ存在なのだと判断し、私に密かな情熱があるからこそ一層念をこめて話をしものを教えるのだ、と考えたようです。それに、恭しく密かな愛を不快に思うのは、あらかじめ何か強力な嫌悪の情を相手に抱いてしまった女性くらしいのです。

彼女から高い評価を得たとはいえ、また、幸運に突き放されても勇気を失う私ではありませんでしたが、しかし真実の生まれを彼女に明かす機会をつかむまでは無謀であっても、我が情熱は、細かな配慮や奉仕によって彼女に示そうと決めたのです。ある日、彼女の従姉妹の一人である美しい娘さんが母親とともに訪ねて来たことがありました。私の生徒は従姉妹を歓待しようとしたものの、母親たちが非常に重要なことで話しあっていたため、おやつを作るように命じて彼女を私室に招き入れ、私を呼びよせて何か素敵な話しをしてくれるよう求めました。この命令に従い私は、彼女たちが退屈するような題材を選んではいけないと思い、プシケ⁽⁷⁾の冒険について話しをを始めました。それにこの時は、恋愛物語について詳しく話すのが嫌だという気分ではなかったのです。特に、愛の神アムール⁽⁸⁾の美を描写してさしあげましたが、私が詩の文体を用いたので彼女たちはこれを素晴らしいと思ってくれました。私は、キューピドン⁽⁹⁾の肉体を雪花石膏の像にたとえてこまやかに描写し、その姿態を寝床に横たわせたいと思わせるよう努め、髪の毛を金糸と見まごうかのように語りましたが、それだけでは満足できなくなりました。その上私は、人が普通注意しないところまで彼女たちに描いてみせたい、と思ってしまいました。キューピドンの目を、目蓋に覆われた目を、彼女たちに示したいと欲したのです。そして、それが二枚のバラの葉が被さったきらめく二粒のサファイアのような、と私は彼女たちに大胆にも言ってしまいました。その口は、完璧に整った形と釣り合いをあらわしていると言って描写し、さらに、色あざやかな真紅の唇は二列に並んだ真珠を隠し、海が生み出すどんな物より白く貴重なのだ、とも言ったのです。

続いて、愛の熱狂に達したプシケのしどけなさを描き、また、彼女が無分別にも性急になって、熱い油を一滴愛神の翼に落としてしまい、愛が愛神を傷めることになった様を語りました。

その後で、キューピドンの恐ろしい目覚めの話をし、私の気のむくままに非難の言葉をプシケにあびせかけましたが、二人の美しきお嬢様たちは、私とは別の考えかたをしているのに、それを認めるのでした。

しかし、不運な恋する女の嘆きを語り、彼女がこの神様に背くようなことをしたのは魔がさしたためであり、嫉妬に狂った姉妹のそそのかしにあったためでしかない、翼を焦がしたのも邪気のない一心な気持ちにつかれてのことなのだ、こう私が言いますと、話に耳をすましていた娘たちは、涙を流しました。私の主人は顔の前に羽の扇を広げ、目が濡れていることを隠そうとします。

従姉妹の方にはそれほど細やかな配慮がなく、目にハンカチをためらわずにあてて、無邪気にも、大変優美な言葉で苦悩がかきたてられ感動したと、打ち明けてくれました。私の若い熱狂的な話し方が効果を奏した後まもなく、二人の美しい娘たちが感動から賞めて、話の続きを聞こうとしたところ、親類の老女がやってきて暇乞いの挨拶をし、娘にも退散することが人を介して知らされました。そのため、私は神話を話し終えることができず、続きは二人の従姉妹たちが次に集まる時まで延期されました。

主人の親戚の娘さんが退出する際、私に特に心をこめて礼を述べるので、私は彼女の瞳を見ていて、もしこの家でやとってもらえなかったとしても別の女主人をみつけ損じることはなかっただろう、と考えました。私は彼女の言葉のひとつひとつに対し、謙虚さと感謝の念をこめてお答えしました。ところが、私の生徒さんはこの謎めいた場面にあわせて、全く邪気のない挨拶を悪く解釈したのです。従姉妹がいなくなってしまうと、自室に戻り、プシケの冒険の続きが知りたいと言って私にもついてくるよう命じました。しかし、私が彼女のそばに行っても神話については何も言わず、それに関して触れるにしても、単に副次的なことばかりで、話しの本筋については何も述べません。彼女は十五分の間沈黙し、時折、冷たく怒った目付きで私を見つめるのです。が、口をあげた時は、親戚の娘さんの口から私が受けた讃辞への、ひどい非難の言葉を吐くばかりで、それらの讃辞は私としては全く予期もしていなかったものなのに、彼女のほうは私が熱心にそれを請うた、とするのです。

この高慢な心の持ち主は、彼女の親類の娘の心と美しさに私が魅了されてしまったのか、それとも親類が彼女への奉仕を放棄させるほどの人物だったのか、と私に尊大な態度で尋ねるのでした。またさらに、自分のもとを去りたいと言う人を力づくでそばにとどめておくことは望まない、選択というものとはどのような束縛も受けずになさなければならない、そう彼女はつけ加えて言うのです。

私はこの話しを聞くと胸がしめつけられるような気がし、真っ青になってしまったため、美しき主人はすぐに私の苦痛に気づき、そんな原因をつくってしまったことを後悔することにまでなりました。このことについては気分が少しもとに戻った時に、彼女の疑いが私を辱めるものであり、そんな考え方を彼女にさせるようなことは何もなかった、と答えておきました。そして、彼女が初めて私に命令を与えた時以来、私は自由を失ってしまっている、不幸にも彼女への奉公から身を退かなければならなくなっても、別の女性に仕えるというような卑怯なまねはしない、彼女だけに私をとりこにする力があり、彼女の寵愛と善意が、彼女のたぐいまれなる美しさとともに私にとっては絶ち切ることのできない鎖となっている、そう言ったのです。私たちの話し合いは二時間続きましたが、大変快いものだったため、一瞬のことのようにも思えました。嵐のあとに晴朗なる空が現れるような舞台、始まりは混乱と不安の材料が渾然として、中盤以降は危難や苦悩に満ちているが、必ず歓喜で終わるような舞台、そんな舞台で使用されそうな懇願の言葉の言い回しを、二人の会話は用いていました。私は罪のない被告人の役を演じ、彼女は偏見を持った裁判官や恨み深い告訴人の役割を演じたのでした。そして、私が長々と弁護をした結果、私たち二人は意見の一致をみることとなりました。

28. 薄幸の小姓はどのようにして主人の侍女に秘密を知られたか。

私たちの会話は誰からも邪魔されませんでした。しかし、侍女の一人にこのことを利用しようと思ったものがいました。鋭敏な精神の持ち主で、まもなく私たちの秘密を深く知ることになりましたが、私の利害に反したことは決して何もませんでした。抜け目のないこの人物は私の主人のお気に入りでした。私たち二人が随分長い間話をしてきたのを目撃した彼女は、私が部屋から出たところ階段のところまで会いに来て、まだ日の光で明るい開き窓のもとで私を間近から見つめ、面白半分に、こう言ったのです。

『すっかりお顔つきが変わってしまいましたね、どこかお悪いのですか。お目が潤んでまっかでいらっしゃいますよ。お泣きになったようですわね。さっきはありませんでしたのに涙の跡のようなものが頬に見えますわ。』

このように言われて私は全く驚いてしまいました。困惑しながらも、顔にあらわしてしまったことについて何か説明をしなくてはと考へ、口実を探しました。しかし、娘は本当の理由を知っている、と断言します。そして、大変危険だから人には決して知られずに暮らすよう忠告したい、と言います。そして、彼女自身は口が堅いし二人に共通の主人に対して忠実だから、自分に対して恐れるべきことは何もないのだが、わずかでも私の無謀な情熱が外に漏れれば、それは暴かれて私の完全な命とりになるだろう、ことに、どうやら同じ女性を愛していると思われる待臣は、私が受けた優しい取扱いや女主人から全く期待できない様子なので、羨望と敵愾心がかきたてられるに違いない、こう彼女は述べます。さらに詳しいことをたくさん語ってくれましたが、それをここに記すとあまりにも長いものになってしましましょう。ただ、こう言っておけば十分だと思います、情熱的に恋をする若者の狂おしい思いを、この時私は存分に味わされたのだと。若者は心の病をその原因となった女性に打ち明けられなかった、しかし、その異常なほどの憂鬱や、義務のなせる業というより愛の証拠といえる熱意に強く燃えて彼が外にあらわした心遣いから、それをまわりの人のほとんどが見抜いてしまったのだと。

彼女の親切な助言を私が聞き、多くの愛情と誠実さに基づいていつまでもお互いに仕えあうことを誓った後、が、それだからと言って、生まれつつあった愛について彼女には重要なことは何も述べず、私は自室に退きました。しかし、これは彼女の忠告を反芻したり、その用心深さから何か得ようとしたためではありませんでした。主人の美しさのなかに感じられた魅力を、人に邪魔されずに胸に抱き、また、少し前に彼女が私の目や耳から注いだ甘美な毒を、心ゆくまで味わいたかったからなのです。彼女が私に対して持ったことを証拠立てた可愛らしい嫉妬心を、私は何度も何度も快く思いだし、様々な結論を引き出しましたが、どれもが自分に有利なものばかりでした。とりわけ、決して忘れることのできないある特別の好意を楽しく思い出しながら、生まれかけた希望をさらに膨らませていたのです。その思い出とは接吻のことで、おそらくは愛の歓喜からではなく憐れみの情から与えられたものでしょうが、理由はどうであれ、私を悦びでうっとりさせるにたるものなものでした。

歓喜であれ苦悩であれ、愛がひきおこす感情というものは奇妙なものです。これを感じることなく日々を送ったものは当然、愚かなまま死ぬものとされています。軽やかにいきいきと燃えるこの炎は、どれほど鈍感な魂をも目覚めさせ、いかに鈍重な感受性であろうと容易に繊細なものに変えるのです。魂がこの炎で燃えあがると、炎に似た活気をおびます。魂が愛の対象すべてに対し細やかな心遣いを示すようになると、人はどんなささやかな好意にも敏感になるし、またどんなにささいな侮辱にも、痛痒を感じないではいられなくなります。そして、両者の交わりあう場は、バラよりそのとげのほう为数多い場ではあれ、心地のよいところなのであります。ある場合には、好意的な一瞥、かすかな微笑み、甘い一言などが歓喜で人をうっとりさせますが、ある時には、相手のちょっとした拒否、尊大な目付き、わずかな冷淡さだけで人は嫌悪の情を催し、相手を殺しかねません。愛とは無軌道な暴君で、容赦なくおのれの偉大さを知らしめます。愛は与える時は並はずれの気前のよさを見せ、要求する時は、その臣下から自由や休息までも奪います。彼らからあらゆる善をうばいとり、苦悩が軽減するかもしれないという希望すら、残してはやらないのです。

29. 女主人を密かに慕うその家の待臣の怒りを薄幸の小姓がかきたててしまったのはどこまでありふれた機会においてだったか。

翌日、私は昼近くになって起きだし、庭に散歩に行き、それまでの生涯におこった事件を思い返していました。私の脳裏には、ものごとの移ろいやすさが一幅の素晴らしい絵となって広がっていました。私は、これから幸運に恵まれるはずの生まれたての子供の姿となって現れたり、運命が掃きだした藁くずのようだったりします。過ぎ去った昔の危難を思い出して身を震わせたり、これからの幸福を期待して溜め息をもらしたりし、まさか自分がおのれの情熱のとりこになっているとは考えてもみませんでした。失寵においても幸運においても私ほどは話題にのぼったことのない小姓がついにそこに姿を現して、深い夢想から私をひきだし、主人が呼んでいると私に知らせました。瞬時の間もおかずに私はこの命令に従いました。あの方は御自身の私室にいて私がそれまで目にしたよりはるかに美しく、きわめて念入りに身を整えていました。すそが銀でふちどられたバラ色のサテンの部屋着を身に纏い、アウロラ女神⁽¹⁾のいきうつしかと思えたほどです。美しい髪は、まるで三美神⁽²⁾の手で整えられたかと思えるほどみごとにカールされていました。お顔はあまりにも色が白く輝いてみえるため、たいそう貴重な滑石油でも塗ったのかと思われれます。また、悩ましいことに、両の目には誰がともしたか知れない新たなきらめきが認められ、私は正視し続けられませんでした。近づくと彼女は私の腕をとり、椅子に再び腰をかけ、夜をどう過ごしたか、彼女に仕えてどう感じているか、と尋ねます。私はほとんど休めなかったことを隠しませんでした。私の彼女への奉公については、これは世の中でもっとも快い鉄鎖であり、その鎖に進んで繋がりたいと思わせた栄冠は今までの世には全くなかった、と彼女に言明しました。詩情豊かにこのような讃辞を彼女に述べたのち、できうる限り巧妙に彼女への熱愛の情を示す言葉をつけ加えましたが、この時私のむこうみずな情熱が人に知れてはいけないと思い、できうる限り慎重を期しました。私た

ちの甘い会話は、母親からの伝言を伝える家の侍女たちの出入りで三、四度妨げられましたが、夕食に彼女が呼ばれるまで終わることを知りませんでした。諸事のしきたりに従い、侍女がいる間は私が話しをしたりそれを聞いてもらったりすることは中断されたのですが、そのしきたりの実施の方法が次には私に好都合に働き、私はさらに彼女を見つめ、仕え続ける榮譽をものにしました。突然、あの方は食卓の世話係の貴族に二、三の用事を与え、彼のかわりに私がお側で仕えるよう命じたのです。私の用心しなければならない侍臣はこうして再三にわたって職務を中断され、その代理として私は彼の仕事をするよう選ばれたのでした。しかし、愛に狂ったこの男は私がかわりに彼の職務を遂行するのを見て絶望し、私に高く支払わせようと思いたちました。この男は席をはずした間、私がわれわれの主人に飲み物を差し上げたことにひどい嫉妬心をかきたてられ、それ以来私に毒いりの肉を食べさせようという企てをたてたのです。

30. 薄幸の小姓の主人が再び表にあらわした嫉妬心と、主人にすがって泣きながら考えついた愛を疑われないためのある工夫について。

二日とたたないうちに、主人の従姉妹は挨拶の言葉を主人に送ってきました。とくに、彼女の母親の加減がよくないと告げ、主人が彼女の家を尋ねる時には私も連れて行き、神話の続きを聞かせてもらえないか、と懇願しました。従姉妹が遣いによこした小姓はフランス人でしたが、主人は手紙を読み終えた時この小姓が私に耳もとで話しをしているのに気づき、不安に陥りました。小姓が私に言っていたことはとるに足らないことで、ただ、私にイギリスに来てどの位になるかとか、彼が五、六年前から慣れ親しんでいるイギリス人の風俗・習慣に関して知っていることのうち、役にたちそうなことを話しに暇な時に会いにきてもよいかどうか、などについて尋ねていただけなのです。しかし、うら若きこの美女は、最初のうちは好意的な目で私を見ていましたが、とるにたらない内緒話を悪い方にとるようになりました。従姉妹が私のことを愛情こめて称賛していたように思えたことに嫉妬を感じていた主人は、従姉妹が私を買収し、今の奉公をやめさせるために小姓を遣わせたのではないかと邪推したのです。受けた伝言のためか、あるいは小姓の話に私が耳を貸しているのを見たためかはわかりませんでした。主人がまったく度を失い、不安に陥っているのに私は気づきました。彼女はしばらくの間私に目を見据えていましたが、私にそれが気づかれたとわかるやいなや小姓についてくるように合図して、母親の部屋へ急いで立ち去りました。私は主人の不機嫌な姿を見てしばらく狼狽しましたが、その理由については推測がつきませんでした。ようやく、小姓をともなって彼女が戻ってくるのを私は認めましたが、ちょうどその時、彼女は従姉妹に伝えて欲しいことをすべて小姓に対し英語で言い終わったところでした。ところが、少年は私の不運と手を結んで私と主人の二人を仲違いさせようとするかのように、長い間階段の扉のところにとどまり、まだ何か話したりないことがある様子で時おり私に目で合図をします。私の主人は小姓の顔の動きの一つ一つを念入りに観察し、そこからいくつかの結論を引き出しましたが、それらに彼女は苛立って私に言いがかりをつけてきたため、私はひどく動揺することになりました。軽率

な同国人が退出すると、私の熱愛する美しくいとしい人はしばらく物思いにふけていましたが、そのうち部屋の窓際に私を呼び寄せ、苦々しく微笑みながら、何かひどく不快なことで侮辱を受けたような様子をし、こう言ったのです。

『ねえ、先生、さぞかしお喜びのことでしょうね。そんな風に生徒を右から左へ取り換えてもあなたはほとんど後悔なんかなさらないのでしょうか。従姉妹は私と同じことをやってもらいたい為に、母にあなたを欲しいと頼んでそれであなたを喜ばせている、そうに間違いないでしょう。本当に、彼女ははともきれいな娘ですわ。あなたにも彼女の心ばえはとても快いものに見えたのでしょうか。だけど、あなたのことが好きだという点では私のほうが上ですわ。』

こう言うと、彼女の目は涙でうるみまみした。くやしさと苦痛が顔に浮かぶので、何も悟られまいと思ひ、その場を逃げ去ろうとしましたが、私は彼女のドレスをつかんで引きとめ、ひざまずき答えました。

『何ということ私に、おっしゃいますか。いったい私がこの家を出て別の主人に仕えなおすなどということがあるとでもお思いなのですか。お嬢様、あなたの美点の素晴らしさや私の心優しい愛情についてそこまでご判断をお誤りになりますか。そして私を以後縛ろうとする鎖がダイヤモンドでできているわけではなく、それもある褒章の確かな保証として私にかけられようというのに、私がお嬢様に今の鎖を変えたいとお思いになったのですか。変えるくらいなら死んだほうがましですし、お嬢さまに捨てられれば墓が私を迎え入れるだけなのだとお忘れくださいますな。』

こう言い終わると嗚咽がこみあげて余りにも激しく胸を締めつけ、目には涙があふれ続けたので、美しいお嬢様は私のことを大変お哀れみになりました。私を助け起こして、長い間お手に接吻をさせてくださいましたが、そこに私の涙はひっきりなしに流れ落ちていました。非常に優しいお言葉をいただきましたことで私の苦悩も和らぎ、大変甘美な思いがしてきたため、その苦悩さえ祝福してもいいと感じられました。その時家の奥方様がたまたまお部屋からお出ましになり、私たちのところに来ましたため、もう少しのところで私たちは不意を襲われ、私が流していた涙を目撃される場所でした。しかし、私は物音をわずかに聞くやいなや、目が涙で腫れあがり真っ赤になっていたことに対しうまい言い訳をするために、かなり愉快なことを考えつきました。ハンカチを目の上にあて、笑い過ぎて涙を流している風を装ったのです。またその思いつきを余りにも自然に実行したので、心優しい夫人はだまされてしまいました。最初、奥様は何がおかしくてそれほど笑うのか私に聞きましたが、私はそれには何も答えずタピスリーに体を押し付け、笑いたいという途方もない欲望をこらえているかのように振る舞いながら、さらに長い間笑い続けました。私は、ある極めて滑稽な光景を目にして笑いがとまらなくなってしまった我が身の弱さを彼女に詫言いました。母君はいったいそれがどんなものだったのか私に尋ねましたが、喋りだしたらまた私の笑いがさらに激しくなるに違いないと考え、すぐにどのような折に見たのか娘の方に問いかけました。その時になってようやく、猿のような顔をした体の前と後ろにこぶのあるかなりの小男が、珍妙な服装で窓

の前を通りかかった時に馬がつかずいたため、馬の首からどすんと落ちてしまい、その拍子に着ていた外套が頭に覆い被さり、半ズボンの紐も切れてお尻が丸見えになってしまった、こう私は彼女に話したのです。そして、我慢できずにこんなにもひどく笑ってしまっただけで大変恥ずかしく思っているが、小男が余りにもおかしかったので笑いやめることができず、死んでしまいそうだった、と付け加えて申しました。老夫人は話を聞いて多少は笑いましたが、私の無遠慮な行為を若さのせいとしました。しかし、娘のほうは私の思いつきを素晴らしいと褒め、この策略を講じたことを私に感謝していました。

こうしてこの一件にかたはつきましたが、しかし再び、私にとっては余り愉快ではない別の問題が持ち上がりました。重要な用事ができて心優しい母君が一日中外に出られなくなったため、彼女は姉妹のところを私を出向かせて挨拶の言葉を伝えてもらおう、と考えたのです。誰か他の人間にその遣いをさせようと私の生徒さんが母君に話しかけましたが、母君は頑として受けつけませんでした。従って、意に反してではありましたが、また新しいもめごとの種になると思いながらその伝言を伝えるために出掛けて行ったのです。

31. 薄幸の小姓の主人の嫉妬心の再燃と、それが彼女の愛をどれだけ進行させたかについて。

誰か別の人を愛しているのではないかと主人から疑われたのは迷惑な話でしたが、しかし、従姉妹が私に気があるのではないかと彼女が考えたことに関してはほとんど間違いはありませんでした。それは私が主人の従姉妹にしてさしあげるようにあちらで言いつけられたことから察することができました。家のものたちがみな私を手厚くもてなしてくれるのには驚かされましたが、それは、彼らがそのことで主人にこびようとしていたからにはほかありませんでした。フランス人の小姓は私を中庭で見かけるやいなや、それを彼の若い女主人に知らせに走り、やがて二人の女性を伴って私の目の前に戻って来ました。母上の私室に通していただきたいと最初に頼んだのにもかかわらず私はその娘の住居のほうにまっすぐ連れて行かれ、そこで娘から大喜びで歓迎されて何度も礼儀正しく抱擁をされました。それらのもてなしのどれに対しても私は氷塊のように冷やかに対処し、長くそこにとどまらずに戻るよう命じられている、家で私に用があるとされているなどと申し述べて、暇乞いをするばかりを執拗に繰り返していました。しかし、それは言葉だけで空しく終わり、そのたびに私は力づくで引き止められます。砂糖漬けが持ってこられ、それを食べるよう私は勧められました。私が苛立ちを表しても曲解されてしまうのです。美しい従姉妹は私が主人に不快を催させることを心底おそれているととらえ、私の奉公には何か厳しいものがあるのだと考えました。あちらがもっと優しく取り扱ってくればいいのになどと彼女は言って、その件については大変親切なことを数限りなく語りながら、決してありふれてはいない愛の証しを巧みにそこにさしはさむのでした。向こうにいた二時間というものはそんな会話を切り捨てるのに精一杯でしたが、主人の方は自分が不快にならない範囲で、私があちらの家にもよい時間というものを計算できたため、私は彼女に対し償いをさせられることになりました。病人を見舞い、そのお礼の言葉を賜ってから

私は家に帰り、主人に会って辛くて骨の折れた仕事の報告をもれなく正確に、つつみ隠さずにいたしました。しかし、そんな説明だけでは満足が得られません。そこねた機嫌をなおしてもらうためには従姉妹の家には二度と行かない、翌日の訪問に私がお供をするという約束が従姉妹と彼女の間でできていたが、私は仮病をつかってその役を免除してもらい、こう誓うことになってしまいました。そして、真実らしくみせるため、翌朝私は血を抜いてもらい、寝室から一步も外にでないという取り決めが交わされました。

ことは決められた通りに運びました。私は瀉血を施され、かなり遅くまで寝床にいました。母君とともに伯母上の家にでかけた私の主人は、私がお供できなかったことの失礼を従姉妹に詫びたところ、従姉妹は私の病気を知って悲しみの意をあらわし、すぐにその気持ちを私に伝えてきました。彼女は来客が自宅を出るとすぐに私のところにフランス人の小姓を遣わせ、礼儀正しい挨拶を私に送り、瀉血をした腕にまくようにと大変きれいなスカーフを届けてきました。挨拶に対しては、私はそれを受け入れ、優雅に振る舞って受け答えに応じましたが、スカーフは受け取ることを固辞し、自分がそんなに立派な贈り物に値いしないことをよくわきまえていると言って謝り、極めて高価でまばゆいばかりなのでとても身につけることはできない、と申しそえました。しかし、小姓は私の辞退を単なる儀礼としかとらえず、どれほど礼を欠かさずに注意しながら抵抗してみても、スカーフを広げて私の首のまわりに巻きつけてしまうのでした。そうこうするうちに、私たちがいた中庭に四輪馬車が入って来、乗っていた私の主人は扉のそばにいたため、従姉妹の小姓の姿と彼が私に与えようとしていたスカーフをはっきりと認めてしまいました。私が主人に気付いたときどうなってしまったか貴方に申しあげましょう、まったくのっぴきならない状態に陥ったのです。もし人が苦痛と恥辱心から死ぬことができるのなら、私はその場でただちに死んでいと、貴方に断言することができます。

すぐに私は、主人が降りる側に進み寄り、手を差し出しましたが、彼女は私に助けられるのを好みませんでした。部屋について行って事情を説明しようと思いましたが、彼女は扉を閉めるように命じたため、それで私は決定的に罰せられ、ひどい責め苦を与えられることになったのです。しかし、情け知らずのあの美女の怒りをなだめることに対しては、私は全く希望を捨てずに、困惑しつつも「手を引けば勝負は負け」というかなり当を得た諺を頼りにして、夕食後からずっと夜まで主人の部屋の扉のところにい続ける決意をしたのでした。主人のお気に入りのお付きの女性がしばらくしてから出て来ましたが、階段のところに石像のように身動きせずにいる私の姿を見て、通りすがりに私にそんなに身を苛んではいけない、二人であのかなり気難しい人の気持ちを操らなければならない、そのためには策を練り、忍耐強く待たなければならぬ、と話しかけて来ます。彼女は戻ってきて私には閉ざされた神殿のなかに再び入ろうとした時、もう一度、うまくとりなし私を助けてあげようと、約束してくれました。おおよそ一時間半ほどたったでしょうか、私に助言と援助をかくも献身的に与えてくれたこの守り神は、主人の住居のほうに私を通そうとして扉を半開きにし、それから突然外に出てきて、私に部屋に入るよう合図しました。中には主人が一人でした

ため、再び彼女の愛情を得ようと努力するためのまたとない機会に恵まれることになったのです。最初は彼女の手厳しさを身をもって体験しましたが、私が抗議しめざめと泣いたために、彼女の気持ちの荒だちは最後には和らぎました。私は許しを請うために彼女の足下に身を投げ出しましたが、それを手ではねのけて私に最初に言った彼女の言葉は、このようなものでした。

『何ですか、ひどい方ね、あんな裏切りをしておいてよくもまた私の目の前に姿を現すことができるわね。なされたことを厚かましくも否定して、不誠実をさらに重ねようというのですか。もっとはっきりとお認めになるべきですわ。それとも、あの場を見た私の目をとがめて、真実を幻想だったと言いくるめようとなさるのですか。従姉妹に鉄鎖で結ばれた公然の奴隷に、あなたはなされたのではないのですか。さっき送られてきたスカーフはいったいどうしたのです。あの愛の証しはあなたに恥ずかしい思いをさせるものではなかったはずよ、だってあなたはあれを喜んで身につけて私のことをうちのめしたのですもの。』

私は彼女の激烈な感情が過ぎるにまかせていましたが、このような非難が彼女の口をついてでるやいなや言われたようなことは何もしていない、と声高に主張し、彼女の従姉妹とのおつきあいの際も決して彼女を裏切ったことはない、要するにあの小姓がまたやって来ただけなのだ、と繰り返して何度も彼女に誓いました。彼女のなかで疑惑は非常に強くなっていましたが、そのために私が苦しんでいるのを見て、ついに彼女も疑いを捨てました。彼女が私に抱いていた好意はこの件で減るどころか、かえって増したほどです。愛が不当に辱められたことで私はすっかり仮面をぬぎ、美しい主人にそれまで私が自分の生まれについて隠していたことを打ち明けました。その時、私が貴族の生まれで、どれだけの榮譽を受けつつ育てられたかについて彼女は知ることとなったのです。若さというものは大胆で気違いじみたものです、その上私は、しばしば持ちたいと思っただけに過ぎない財産をしっかりと所持しているものとしてしまって、三ヵ月たたないうちに英国の大貴族にひけをとらないほどの装備と輝きを整えて御両親に結婚を申し込みに戻ってくると、彼女に断言までしてしまいました。まったく私は単純で、あの後再会してもいない錬金術師の約束をあてにしてそれらの盛運のすべてを彼女に約束してしまったのです。当然、主人は私の価値を認め将来には財産が手にはいるのだと信じてしまい、私が述べたことをそのまま自分の心に刻みこんでしまったため、以後は私をただ単に感じのよい下男とは見なさず、まもなく彼女と結婚をすることになる今は身を偽った貴族だと考えるようになり、何のためらいも感じずに私への愛に身をまかすようになりました。こう打ち明けて以来、私たちはまたいくつも秘密の愉快的話をしましたが、ところがそれが私の身をあやうく破滅させるところとなってしまいました。根も葉もない希望が私たちの中で膨らんできたため、彼女は余りにもあからさまな愛を思わず表にあらわしたのです。（次号に続く）

(註)

- 1) ミロール、Milor 一族の娘。(ジャン=バティストの注による)
- 2) テームズ河の河口に位置。
- 3) 古代ギリシアの小説家 Héliodore の書いた恋愛小説『テアゲネスとカリクレイア』（『エチオピア物語』の別称で知られている）のこと。タツソやセルバンテスの手本となっている。また、ラシーヌやボワローの愛読書だった。
- 4) 『狂えるオルランド』（1532年に四十六歌として完成）をさす。十六世紀イタリアの最高傑作。トリストンはアリオスト Arioste (1474-153) 3からも影響を強く受けた。例えば『書簡集』（1642）では、アリオストからも主題を借りている（c. f. Lettres Héroïques LX）
- 5) Godefroy タツソの『解放されたイェルサレム』の主人公で実在の人物（1061-1100）。第一回十字軍でキリスト教徒を勝利に導いた。
- 6) 『解放されたイェルサレム』（1575）のこと。タツソ Tasse (1544-1595) はアリオストと並ぶイタリアの大詩人でトリストンに影響を与えている。
- 6) Psyché 二世紀のローマの作家アプレイウスの作品『黄金とロバ』の主人公。王の娘で絶世の美女だった。神託により怪物の人身御供にされたが、怪物と幸せな結婚生活を送ることとなった。しかし、姿を見せない夫を一目見ようとして夜、燈火で照らすとそれはアフロディートの息子で美青年のエロス・アモル(=アムール) だった。びっくりして熱い燈油を彼の上にたらしってしまったため、夫は逃げ出した。彼女はそれを追って世界をさまようが、アフロディートの怒りを買って様々な難題を出される。地獄の女王ペルセポネーから美の箱を持ってくるという最後の試練に挑んだ時、禁じられていたのに好奇心に負けて箱を開けてしまったため、深い眠りに陥らされる。彼女を忘れられなかったアモルが彼女を眠りから覚まし、ゼウスの許可を得てから、アフロディートと彼女を和解させた。
- 8) Amour ギリシアの愛の神。註の 6) を参照。
- 9) Cupidon ローマのアモルにあたる。註 6) を参照。
- 10) Aurore 曙の女神。
- 11) Graces、すなわち Aglaé、Thalie、Euphrosyne の三女神のこと。